

主 題：主がまず愛してくださった 4

聖書箇所：ヨハネの手紙第一 4章19節（3章21-24節）

ヨハネ第一の手紙3章20節から読みます。「:20 たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。:21 愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、:22 また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。」。主なる神は、あなたをご自身の御前に歓迎してくださると言います。皆さんにぜひ考えて頂きたいことがあります。それは神があなたを神の御前に歓迎してくださると言うことです。ヘブル書の著者は「こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。」（ヘブル10：19）と言っています。また、エペソ3：12には「私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって大胆に確信をもって神に近づくことができるのです。」とあります。つまり、ヘブル書の著者もパウロ自身も「今、私たち信仰者はこの絶対者なる神の前に立つことが赦された。神は私たちが歓迎してくださる。」と言っているのです。それがどんなにすばらしいことなのか、そのことを私たちはしっかり覚え続けていかなければいけないのです。ヨハネが言ったように「たとい自分の心が責めても」です。イエスを信じた後も、悲しいことに、私たちは罪を犯しています。正しくありたい、神に喜んで頂きたいと願いながら生きていても、多くの失敗を繰り返します。神に喜ばれないことを選択している自分がいます。正しいことと間違っていることを分かっていながら、間違っていることを選択することがあります。そうする時に私たちの心は私たち自身に言います。「それでもあなたは救われているのか？それでもあなたはクリスチャンなのか？」と。また、私たちの心は私たちに言います。「だから、あなたはダメなのだ。だから、あなたは主の前に役に立たない信仰者なのだ。」と。

もし、この中で主イエス・キリストの恵みによって救われていながら、「自分は本当に罪深い存在だ。こんな私を神様はお用いになることなどあり得ない。」とっておられる方がいるなら、次のことを覚えてください。私も同じように思っていました。パウロのことばを借りるなら、「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」（ローマ7：24）、何と惨めな人間か、どうしてこんなに失敗ばかり犯すのだろうか？なぜ、神がお喜びにならないことを選択するのだろうか？と、本当に惨めだと思いました。その時の自分を振り返ってみるなら、ごく普通の生活を送っていたと思います。教会に行っていたし、奉仕もしていました。しかし、心の中には常にその思いがありました。「なんと惨めな者よ、なんと愚かな者よ。」と。しかし、そのような心を神は解放してくださったのです。実は、今読んだローマ人への手紙7章24節の次にはパウロのこのようなことばが記されています。聖書を見ていながらそのことに気付いていませんでした。そのパウロの告白は25節「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。…」、罪との葛藤を語ったパウロ、そして、敗北に次ぐ敗北を帰しているパウロ、「私は本当にみじめな人間だ」と告白したパウロ。

しかし、彼はそこで留まったものではありません。彼はその後、神に対する感謝をこのように主にささげるのです。「ただ神に感謝します。こんな私を救ってくださった神様、感謝します。こんな私を罪から救い出してくださった神様、感謝します。私を生まれ変わらせてくださった神様、感謝します。」と。だから、私たちは罪を犯す度に、私たちにささやき続ける心に対してこのように言わなければいけないのです。「心よ、おまえはダメなやつだ、ダメな信仰者だ、神の前に役に立たない信仰者だと言いつけるけれど、神は私を受け入れてくださった。「神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだから…」と言われているように、神は私が私のことを説明する前から私のことを分かってくださっている。だれよりも私のことを知ってくださっているから。」と。詩篇103：14で「主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。」と歌われている通りです。私たちが土くれにすぎないことを神はちゃんとご存じだと言うのです。詩篇139：1-4にも「:1 【主】よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。:2 あなたこそ私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。:3 あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。:4 ことばが私の舌にのぼる前に、なんと【主】よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。」とあります。私がことばを発する前に、私がどのような思いを抱いているか神は知っていると言うのです。

ですから、あなたのすべてを知っている神が、それを知った上で、あなたの愚かさを知った上で、あなたの罪深さを知った上で、そのすべての罪を完全に永遠に赦してくださったのです。先ほど読んだ詩

篇103篇で著者はこのように続けています。10-12節「:10 私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。:11 天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。:12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。」と。ハレルヤです！こうして神は、私たちに完全に救いをくださった。罪とは永遠に決別したのです。罪のさばきはもう私たちの恐れではなくなりました。私たちは死んでも生きるのです。私たちは永遠を主イエス・キリストとともに過ごすというその確信を持って生きることができます。なぜなら、神が救ってくださったから、神が私を罪の深みから救い出してくださったからです。

そのように考えると皆さん、私たち救われたひとり一人は主によって与えられたこの救いを感謝することを忘れてはいけませんね！願わくは、私たちは日々の生活において、この神のすばらしい救いを感謝し続けていくことです。このように言えますか？「この神に対する感謝こそが、私たちクリスチャンの生きる動機だ」と。感謝するから、私たちはこの働きをしようとするのです。感謝するから、忠実に従って行こうとするのです。感謝するから、このすばらしい神のことを人々に伝えていこうとするのです。私たちはこのすばらしい神を、そして、このすばらしい神の為してくださった救いのみわざを心から感謝するのです。パウロはそのことをこのように告白しています。ローマ5:2と11を見てください。「:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」「:11 そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいてるのです。」「大いに喜んでいます。」と、同じことばが二つの箇所に出て来ました。これは「誇る」という意味を持ったことばです。ですから、パウロはここで「私はあることを誇っている。あることを心から誇っている。」と言うのです。ジョン・マレーという神学者は「このことばは、最高のレベルの喜び、また、誇りのことを言っている。」と言います。ということは、パウロはこのローマ5章の中で「実は、このことこそが私にとって最高の喜び、このことこそが私にとって一番の誇りなのです。」と言っているのです。

それはいったい何でしょう？2節を見ると「神の栄光を望んで」とあります。パウロはここで「栄光」のことを言います。それは天国のことです。罪赦された私たちには永遠の住まいが備えられている、その天国を覚える時にパウロは「これこそが私にとって一番の喜びであり、これを私は誇っている。」と告白するのです。そして、11節では「私たちは神を大いに喜んでいてる」と言います。なぜなら、この祝福に私たちが与るようになったのは、一方的な神の恵みのみわざだからです。皆さんが神を選んだのではありません。神があなたを選んでくださったのです。66億以上の人々がこの世界に住んでいます。その中で神はあなたを選んだのです。あなたを造る前から、あなたをこの祝福の中に招こうと神がお決めになって、そのように導いてくださったのです。そのことを考えるだけでもクリスチャンの皆さん、もっと感謝しなければいけないと思いませんか？どうしてこんな私がこのような祝福に与っているのか？なぜ、こんな私が死んでも生きるという希望を持って今日生きることができるのか？なぜ、こんな私の罪を全部赦してくださり、しかも、永遠に赦してこの祝福に招いてくださったのか？そのことを考えるとき、それに相応しい感謝を自分はささげているのかどうか？主の恵みに対して、私はそれに相応しい感謝を日々現わしながら生きていくのかどうか？考えてみなければいけません、皆さん！

ルカの福音書17章に、十人の病気の人の話が出て来ます。新改訳聖書の2版ではその病気の名前が出て来ますが、3版では、その病名のヘブライ語をそのまま使って「十人のツアラアト」と書かれています。第3版の訳ではそうになっています。恐らく、差別用語ということで第3版に変える時にこのことばも訳し直したようです。17章11節からこのように書かれています「:11 そのころイエスはエルサレムに上られる途中、サマリヤとガリラヤの境を通られた。:12 ある村に入ると、十人のツアラアトに冒された人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、:13 声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と言った。」、北の方からエルサレムへとイエスは下って来られたのです。ある村に入ったとき、そこには十人の病人たちがいたのです。彼らはその病ゆえに隔離されていました。彼らは遠く離れた所からイエスに声を張り上げて叫び続けるのです。「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と癒しを求めたのです。当然のことです。そうすると「:14 イエスはこれを見て言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中できよめられた。:15 そのうちのひとり、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、:16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。:17 そこでイエスは言われた。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。:18 神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」、本来なら十人みな戻って来て「イエスさま、ありがとうございます。」と言うべきところ、引き返してきたのはたった一人だったということです。

私たちに必要なのは信仰者の皆さん、この祝福に与っている私たちですが、この祝福はすべて神が一

方的に私たちをあわれんで与えてくださったものです。私たちにできることは、この偉大な神を誉め称え続けること、感謝をささげ続けることです。主の与えてくださった約束を喜び、そして、その神に感謝を現わし続けることです。それが私たちのすべての行動の動機となっていくなら、間違いなく、私たちは主に対して忠実に歩み続けて行こうとするはずです。

パウロの証を聞いてください。このように証しています。Iコリント15:10「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。」と、まず、パウロは自分の救いのことを言います。「私がこの救いに与ったのは私の努力ではない。これは神の恵みなのだ。」と語っています。その後、「そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。」と、少なくとも、パウロのこの証を聞けば、この救いに与った後、パウロは必死になって熱心に忠実に主に仕え続けていったのです。熱心な働き人になり、喜んで主に仕え続ける者として歩んでいったのでしょうか。そのことに関してこう言います。「しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と、素晴らしいことは皆さん、神は私たちの内に働いてくださって私たちを生まれ変わらせてくださった。でも、神の恵みはそれで終わりません。神の恵みはあなたを変え続けていきます。あなたが益々主に喜ばれる者に成長していくように、あなたがイエスに似た者として変えられ続けていくようにとあなたを変えていけます。それが神が与えてくださった救いなのです。ですから、神の特別な救いとは、あなたを罪から救っただけで終わるのではなく、その瞬間からあなたの内にわざを為していくのです。そのことを私たちはヨハネの手紙を通して学び続けています。私たちの生き方は変わる、それが神の救いだということです。

このことばを聞いてください。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」、神ご自身があなたがたの内に働いてくださって、このように生きていきたい、このように歩んでいきたいという願いをくださり、さらに、それを実践させてくださると言います。これはピリピ2:13のみことばです。これが神の為さるみわざです。あなたの心を変えてくださり、あなたに新しい願い、思いをくださり、そして、神は助けをもってそれを実現させてくださると。ですから、少なくとも、私たちはこのような信仰者を見た時に、神によって救われた彼らは、罪との戦いの中、神の前に喜ばれる歩みを継続して行こうとして歩んでいました。彼らは神から与えられた素晴らしい永遠を喜びとしながら、そして、その祝福をくださった神を心から感謝しながら生きていました。

このような生き方を見た時に、私たちが考えなければいけないのは、私はそのように生きているかどうかです。どうですか？天国に招き入れられて、私たちの神とともに永遠を過ごすというその日を心待ちにしていますか？今日がこの地上における最後の日かもしれません。今日、私たちはイエスにお会いするかもしれません。その時を楽しみにしていますか？もう一つ言うなら、神があなたにそのような祝福をくださったことを感謝しながら喜びながら、あなたは今日を生きていますか？

今日のテキストに戻って、確かに、私たちは罪との葛藤の中を生きているので、罪が私たちの心を責める時があります。いつまでもそれが続くものではありません。徐々にそのような状態から私たちは解放されていきます。なぜなら、私たちが神の前に正しく歩み続けて行くなれば、—この「正しく歩み続ける」とは罪をすぐに神の前に告白することも含まれています— そうして私たちが神の前を歩んでいくなれば、私たちは神にお会いすることを楽しみにし、そして、日々の生活において神との交わりを楽しみにします。ヨハネのことばを借りるなら、「自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に行くことができ、」、正しく歩み続けて行くなれば、徐々に私たちの心が責めることが軽減していきます。なぜなら、ヨハネはこのIヨハネ3章でこのように言っているからです。1節「私たちが神の子どもと呼ばれるために、—事実、いま私たちは神の子どもです— 御父はどんなに素晴らしい愛を与えてくださったことでしょうか。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。」、神の素晴らしい救いのみわざ、愛のことを言って続いてこのように言います。2-3節「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」、イエスにお会いする日がやって来ます。そして、私たちはその時にイエスに似た者に変えられるのです。そのことを言って、3節「キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。が私たちが知らないのは、御父を知らないからです。神様のその素晴らしい救いのみわざの愛の話をしてこう言うのです。」と、ですから、イエスにお会いすることを日々待望しながら生きている人は、日々、どのように生きていくか注意を払いながら考えると言うことです。罪から離れようとし、神のお喜びになるように生きていこうとするのです。なぜなら、この日が地上における最後の日だとするなら、無駄にしたいくないでしょうか？今日イエスにお会いしてもいいように、その備えをしようとするではないですか？そのこ

とを言っているのです。

ですから、救われたことを感謝しながら、イエスにお会いすることを待望しながら今日生きているならば、当然、それは自分の今日の歩みに影響を及ぼします。少しでも喜ばれることをしていきたいと、そうすると私たちの心が私たちを責めることが少なくなっていくと言うのです。その時にはこのようなことが確信できると言います。あなたが主を覚えて主に感謝して正しく歩み続けて行くなら、次の二つのことに確信を持つことができます。

*** 「心が私たちを責めない」とき、次の二つのことを確信することができる**

(1) 神との交わりを喜んで持つことができる 21節

21節に「大胆に神の御前に出ることができ、」とあります。「大胆に」と訳されていることばは「確信、自信、勇気」という意味を持ったことばです。ジョン・ストットという神学者はこのことばに関してこのような説明を加えます。「このことばは、クリスチャンが今の時のみならず、主イエス・キリストの来臨の時や審判の日にも、神に祈りをもって近づく際の確信を表わす。」と。つまり、あなたが主の前に喜ばれる生き方をしていこう、感謝に溢れた生き方をしていこうとしているなら、あなたは喜んで常に神の前に立つだろうし、そして、そのあなたは主イエス・キリストの前に立つその日を待望する者になるのです。神の前に正しく歩んでいる人は、主の前に立って主から褒美を頂くその日を待望しています。なぜなら、それを待望しない人は、まだ、自分のやりたいことがあるからもう少し待ってほしいと言いつつを繰り返すからです。でも、本当にいつイエスの前に立ってもいい、そして、すべてをご存じである主が私にふさわしい報いを与えてくださると、そのことを思ってそのように生きている人なら、その日を待っています。しかも、日々の生活において主との交わりを楽しみにしています。祈らなければならないのではなくて、祈りたい、いつも主の前に出て行って主の助けを求めたい、主との交わりを、主を称えることを喜びとするのです。主の前に感謝をもって生きている人に、このような確信を神は与えてくれると言うのです。

(2) 祈りが答えられる 22節

もう一つの確信は、祈りが答えられるということです。22節に「また求めるものは何でも神からいただくことができます。」とあります。このみこぼの約束は、私たちの欲しいものが何でも与えられると解釈する人がいます。でも残念ながら、聖書はそんなことを教えていません。なぜなら、その理由が二つも書かれているからです。22節の続きに「私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです。」とあるように、

(a) 「私たちが神の命令を守り、」

(b) 「神に喜ばれることを行なっている」

つまり、神の命令に忠実に従おうとしている人たち、また、神が喜ばれることをいつも選択しようとしている人たちは、「神さま、これが欲しいです、あれが欲しいです」と自分の願いを神の前に祈る人ではないからです。そういう人は、神がお喜びなることは何だろう？神のみこころは何だろう？とそのことを願って生きている人です。ですから、祈りに関して私たちが覚えなければいけないことは、神のみこころは必ず成るという約束を私たちは頂いているということです。私たちはイエスを信じる前から祈って来たから、私たちは信仰を持った後も継続して祈っています。でも残念ながら、異教的な考えを持って祈りをささげ続けているのです。ですから、祈りに関して注意を払わなければいけないのです。今話したように、神の命令に従っている人、神に喜ばれることをしようとしている人、こういう人は神のみこころを求めているのです。

思い出してください。最高の例は主イエス・キリストです。イエスは常に父なる神のみこころに従おうとされ、すべての点で完璧に従われました。すべての点で完璧に父なる神の命令に従われました。イエスは「父なる神さま、わたしはこれを願っているのですが、叶えてもらえませんか？」とは言われていません。「みこころがなりますように」といつも祈っておられました。神の命令に従っている人たち、神に喜ばれることをいつもしたいと思ってそのように生きている人たちは、常に神のみこころを求め、喜んでそれに従おうとする人たちです。先程も話したように、残念ながら、私たちは異教的な考えを持って祈っています。祈りが間違っている可能性があるのです。ですから、祈りに関して幾つかの間違った例を挙げます。四つ挙げますからぜひ聞いてください。

*** 間違った祈りの例**

(1) 祈りが聞かれるためには「従順に生きること」が必要である

「正しく生きたら神はきっと私の願いを聞いてくださる。」「私の願いを聞いてくださる」とそこにポイントがあります。つまり、このように生きていくなら、神が喜ばれるように生きるなら、神はき

っと私の願っていること、私の欲しいものをくれるに違いないと。あくまで自分の欲しいものを手に入れるための手段として考えています。もちろん「正しく生きる」ことは正しいことです。でも、そうすれば自分の欲しいものをくれるに違いない、と思うことは異教的な考えです。なぜそれが間違っているのかと言うと、あくまで、私たちは自分の考える最善が最善だと思い続けているからです。それをご存じなのは神だけなのです。だから、もちろん私たちは自分たちの必要を神の前に持っていくことができます。でも、私たちは「神さま、こういう必要があってこれが最善と思ったりもしますが、それをご存じなのはあなただから、どうぞ、あなたのみこころを為してください。」と私たちは祈るのです。

正しく生きることは必要です。でも、正しく生きるなら自分の欲しいものを手にすることができると、そのように考えて祈ることは間違っています。

(2) 祈りが聞かれるためには「ある特定の場所で祈ること」が必要である

マタイ 6 : 6に「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」とあるように、だから、自分の家の奥まった所を探して、そこに入り込んで「さあ、ここで祈ったら、神さまは私の願いを聞いてくださる。」と。違います。なぜ、イエスがこのようなことを言われたのか？その当時の人々は、祈りをささげる時に人の目ばかりを見ていたからです。長い祈りをささげるとか、祈っている姿を見てもらって人々からの称賛を得ようとしていたのです。イエスはそれは間違っている、「神の関心はあなたたちの心だ。」と言われるのです。でも、彼らの関心は人々の目だったのです。そこで「だれも見えていない所で祈りなさい。」と言われたのです。だから、特別な場所に入って祈るなら聞かれる、そうではないのです。

(3) 祈りが聞かれるためには「熱心に祈り続けること」が必要である

熱心に祈りさえすれば自分の欲しい物が手に入ると。このような人たちは言うのです。マタイ 7 : 7に「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」と書いてあるではないですか？だから、自分の欲しい物を手に入れるためには、熱心に祈り続けたらいいのだと言うのです。熱心に祈ることは大切です。丁度、幼子が自分の親に向かって一生懸命訴え続ける、それは正しい態度です。でも、熱心に求め続けたからといって、子どもにとって有害となる物は与えません。悲しいことに、子どもが熱心に求めたものを与えたことによって、それが子どもにとって弊害を生じることになることを私たちは知っています。なぜなら、私たちは子どもにとって何が最善であるかが分からないからです。熱心に求め続けることは必要です。しかし同時に、私たちが覚えなければいけないのは、私たちにとって何が最善なのか、それをご存じなのは神だけだということです。だから、神のみこころを求めるのです。

(4) 祈りが聞かれるためには「あることば」が必要である

「イエスの名によって祈らなければいけないのです。だってヨハネ 14 : 13に「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」、次の 14 節にも「あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」と書いてあるでしょう？」と言います。だから、ある人たちはこのように思うのです。お祈りをして最後に「主イエス・キリストの名によって祈ります」というフレーズが入っていないと「ああ、その祈りは聞かれない。大切なことを抜かした。」と。またある人は、祈りの中に十字架や復活がないとその祈りは聞かれないと言います。問題は、そのようなことを聖書が教えているかどうかです。イエスが「主イエスの名によって祈る」ということを言われたのは、神のみこころに沿った祈りをささげることと言われたのです。

もし、私たちが主イエス・キリストのみこころに沿って祈るなら、その祈りは必ず聞かれます。「主イエスの名によって祈る」ということは、イエスのみこころに沿った祈りをするのです。私たちがする祈りは、私たちの願いごとを神のみこころにしようとするのです。神のみこころを私たちの願いに沿わせようとするのです。本来の祈りは、私たちの願いを神のみこころに沿わせるのです。だから、あることばを付け加えることによって、その祈りが有効であったり有効でなかったりするという、そういう幼稚なことから離れなければいけません。主のみこころが適うことを私たちが望むならば、神はそれを必ず叶えてくださるといふ確信をもっているのです。

では、私たちの祈りが聞かれるためにはどうすればいいのか？簡単に五つのことを言います。

* 祈りが聞かれるために必要なこと

(1) 救われること

主イエス・キリストの救いを頂くことです。箴言 15 : 29には「【主】は悪者から遠ざかり、正しい

者の祈りを聞かれる。」とあります。ですから、神の前に祈りをもって出て行くためには、神との交わりを持っていなければいけません。救われていなければその祈りは聞かれることはないのです。

(2) 罪が聖められていること

罪を持ったまま神の前に立って祈りを求めても聞かれないということです。詩篇66:18にも「もしも私の心にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。」、イザヤ書59:1, 2にも「見よ。【主】の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。:2 あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」とあります。主の前に立つ時に、私たちは自らの心を吟味して、罪を悔い改めて主の前に立たなければいけないのです。

(3) 主のみこころを求め

みこころに合う祈りだけが聞かれるのです。Iヨハネ5:14に「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるといこと、これこそ神に対する私たちの確信です。」とヨハネは記しています。私たちの欲しいものを得ようとして祈るのではありません。神の最善を望んで私たちは祈るのです。そして、神のみこころは必ず成るのです。それが最善だからです。私たちにとってそれが最善であり、しかも、神の栄光を現わすためにそれが最善だから、神はそのようにみこころを行なわれていくのです。

(4) 神の栄光のため

神の栄光のために祈る者でなければいけません。ヤコブ書4:2-3に「あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。:3 願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。」とあります。自分がそのようなものを欲しいという、そして、自分の快樂のために用いたいという、このような悪い動機で求める祈りを神はお聞きならないと言うのです。ということは、正しい動機で私たちは神の前に祈りをするということです。それは、私たちが生かされているその目的である神の栄光が現われることを求めながら祈ることです。

例えば、「神さま、こういう必要があります。あなたのみこころなら是非それを与えてください。そして、そのことを通してあなたの栄光が現わされていきますように。」と、私たちが望むことは、私たちの必要が満たされたらそれで良いではなく、すべてのことを通してみこころが為されることによって、神のすばらしさが世に証されていくことです。そのことを求めながら私たちは祈るのです。神は私たちの身勝手な祈りに答える必要はないのです。神はご自分の栄光のためにすべてのことを為されるのです。

(5) 神の約束を信じている

私たちが祈りをするときに神の約束を信じる必要があります。マタイ21:22に「あなたがたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます。」、マルコ11:24にも「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」とあります。同じことです。信じて祈ったら何でも欲しいものが与えられるというのではありません。神のみこころが為されるのです。その確信をもって祈りなさいと言うのです。私たちが主の前に「主よ、どうぞ、みこころを為してください。」と祈る時に、必ずみこころは為されるということを経験するのです。そして、祈るのです。そのような心の態度が必要だとみことばは私たちに教えます。

*結論

今日のまとめです。ヨハネは私たちにこの3章からの学びを通して、繰り返して「兄弟を愛することが救われている人の特徴である」と教え続けてくれました。救われているかどうかは、あなた自身が兄弟を愛するかどうかによって明らかになると、そのようにヨハネは言いました。もう一つ、彼は救われた人の特徴を挙げていました。それは「主に従う」ということです。しかも、喜びと感謝をもって…。パウロもそうして生きていました。ヨハネもそのように生きました。信仰の勇者たちは、神が与えてくださったすばらしい恵みを覚え、その恵みを心から感謝しながら生きていたのです。ですから、彼らの生き様は「神への感謝」を現わしていたのです。

パウロはIIコリント5:9に「そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」と記しています。彼はひとつのことだけを願ったのです。

「神が喜んでくれること、それが私の喜びだ。」と。そうして生きたのです。なぜ、そのように生きたのでしょうか？神の恵みを感謝していたから、救われたことを感謝していたからです。天国というすばらしい約束をくださった事を感謝していたからです。罪が永遠に赦されたことを感謝していたからです、私は神の前にいつも大胆に出ることができるということを感謝していたからです。それゆえに、彼はこ

の神に喜んで頂きたいと願ったのです。そのように選択することによって、私の感謝を現わしていきたくと彼は願っていたのです。

最後に、もう一度、パウロのことばで終わりますが、エペソ人への手紙5章で「あなたがたは光の子どもだ」と言っています。8、10節「:8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」、では、どのように歩いていくことでしょうか？「:10 そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」と教えてくれています。神が喜んでくださることが何かを考えて、それを選択してそのように生きていきなさいと言うのです。日々の生活において、神が喜ばれることを自ら選んで、そのように生きて行きなさいと。なぜ、そのようにするのですか？救われたことを感謝しているからです。どうすればこの感謝を現わすことができるのか？どうすれば神の恵みに対してふさわしい感謝を現わすことができるか？その問いかけに対してパウロ自身が答えてくれるのです。「主に喜ばれることを為していきなさい。そのことによって、あなたは自分の感謝を現わすことができます。」と。

信仰者の皆さん、ぜひ、主の恵みを覚えてその恵みを感謝する、そんな信仰者としてこの一週間歩んでください。主が為してくださった救いのみわざを覚えて、それを喜びとし、そして、その喜びを具体的に形をもって表わす信仰者として、主に喜ばれることを選択して、そのように歩み続ける者として生きてください。私たちのこの地上における責任は「こんなにすごい神がいるのだ！この方はこんなにすごいみわざを為してくださった。この方によって救いが与えられるのだ。」ということを楽しむをもって世に証して行くことです。どうぞ、そのように生きてください。そして、私たちの主のすばらしさをこの一週間も人々の前に現わしていきましょう。

《考えましょう》

1. あなたは日々の生活において、救われた感謝をどのように表わしていこうと決心されましたか？
残された人生をどのように生きて、あなたの感謝を主に表わしたいと考えますか？
2. なぜ「救いへの感謝」が、私たちの生き方の動機であるべきなのでしょう？
3. 救われたことを感謝し続けるためには、どうしたら良いとあなたは考えますか？
4. なぜ、自分の願いではなく、「主のみこころ」を求めることが大切なのでしょう？